

栄光

説教・	
「家族のための祈り」	
松谷祐二牧師…1	
特集・私の中の	
クリスマス……2	
召天者記念礼拝	
に出席して……4	
追悼・	
大村ヨ子姉……4	
幼児祝福式・	
収獲感謝報告…5	
長老のファイル…5	
牧師の寄り道……6	

説教

『家族のための祈り』

イザヤ書42章5節～9節

エフエソの信徒への手紙3章14節～19節

松谷祐二

今日は、召天者記念礼拝です。

神がすべての人に命を与え、さまざまな仕方で人生を導かれました。家族を天に送られた皆様は、その家族のために祈る思いを携えて集っていらつしやることでしょう。

もう一つの「家族のための祈り」をご紹介しますと思います。「教会の仲間」という大切な家族のために、パウロは祈りました。「天と地にあつて家族と呼ばれているあらゆるものの源である御父」、全宇宙的な大家族の父である神——その大家族のすべてを知り、こよなく愛してくださる父なる神に。

この、とても捉えきれないほど大きなスケールの神をパウロが信じ得たのは、この神の愛を体現した一人の方、イエス・キリストを

知ったからです。私たちの罪を償

うために十字架で死なれたキリスト、私たちに命を与えるために復活して天に昇られたキリストです。

パウロは、まずこのキリストの愛を知りました。自分自身も、キリストの愛に生かされて生きていくこと、キリストが自分の心の内に住んでくださることを知りました。パウロの「内なる人」、パウロの心は強められました。どんな逆境、艱難辛苦を潜り抜けても、なお励ましを受け、死を前にしても慰められました。

そして、そのキリストの愛を深く知るにつれて、父なる神の愛の大きさが分かってきました。同じくキリストの愛に生かされた仲間が存在が見え始めました。教会と

呼ばれるようになった仲間たちの集まりが、パウロにとって家族となりました。キリストの愛を深く知るにつれて、あの全宇宙的な、神の大家族の姿が見え始めました。たとえ目にする現実には暗く厳しく、死の陰の谷を歩むようであつても、キリストを通して見えた神の愛が、この世に注がれていることを、見る事ができるようになりました。やがて神の愛で満たされた新しい世界が創られる日を、待ち望むことができるようになりました。

そこで彼は、教会に集まっている自分の仲間たちのために、父なる神にひざまずいて祈ったのです。彼自身の身に起こったことが、仲間たちにも起こりますように、と。エフエソの教会の仲間たちにも、今ここにいる私たちにも。「あなたがたが…キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどのものかを悟り、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができ、神の満ち溢れるものすべてに向かつて満たされますように」。キリストの愛がいかに広いか。いかに長い。いかに高いか。いかに深い。

かに深い。私たちは今日、想像することができるとしています。

すべての召天者は、キリストの愛によって生かされていたのです。キリストの愛は、すべての召天者一人ひとりの人生を、すみずみまで照らすように、すべてを御手によって包むように、それほどに広く、長く、高く、深かった。

経堂北教会だけでなく、日本中、世界中の諸教会を通してキリストの愛を知らされた、無数の人々。今の時代だけでなく、はるか昔からそれぞれの時代に、キリストと出合い、キリストを信じて召されてきた、無数の人々。その一人ひとりの人生を満たして余りあるほどに、キリストの愛は、広く、長く、高く、深かった。

こうして、おぼろげながら私たちにも見え始めるのではないでしょう。キリストの愛の背後にある天地万物の父なる神の愛。全宇宙的な大家族を愛してくださる、大いなる神の愛。そんな巨大な愛が、キリストを通してこの世に注がれ、召天者一人ひとりに注がれ、今、私たちにも注がれて、生かしているのです。(召天者記念礼拝)

私の中の クリスマス



闇を照らす光であるイエス様が降誕するクリスマス

あなたの思い出のクリスマスは何ですか？

クリスマスの時期はどのように過ごしていますか？

クリスマスの思い出―鉄箱とNY

入谷眞知子

幼い頃のクリスマスは、母お手製のローストビーフの味とピタリと重なる。戦後10年を経て、街は少しずつクリスマス商戦が始まっていたようだが、多くの家庭は手作りだった。家事と仕事（英語教師）で忙しかった母もしかり。日頃は質素でも、特別な日には注文した牛フィレを、ガス台に乗せて「鉄箱」で焼くのだ。懸命に泡立てた生クリームのケーキも定番で、クリスマス讃美歌を歌い、最後に愛唱歌『緑も深き』でお開き。キリスト者の母は父に遠慮してか、お祈りや聖書を読んだりはしなかったと記憶している。

結婚後、娘が3歳の時に、主人のNY赴任に伴い、マンハッタンからブルックリン橋を渡った麓のブルックリン・ハイツに住んだ。NYのクリスマスシーズンはニュース報道にあるように、ロックフエラー・センターの巨大ツリーを

はじめ、買い物、バレエやコンサート、と一気に街が華やかになる。だが、米国聖公会の教会附属幼稚園へ通っていた娘が呼ばれる毎に、宗教は様々でも、各家庭の根幹にある信仰が健全な家庭環境を作っていることを実感した。

ところで、教会から紹介された英会話の「先生」は、近所の老婦人だった。リュウマチで躰がご不自由なため、月に二度ほど自宅に伺う。驚くほど狭く、家具が少ない1Kだが、清潔で丁寧な暮らしぶりが伝わってきた。毎回実践的な授業？で、ご自分の身の上話は一切なさらない。ところが初めて招待されたクリスマスランチは、自由の利かない手で用意された心尽くしの食卓だった。東欧から兄と自由の国米国にきたこと、両親は高齢で残ったこと、兄妹共に独身で、働きに働いたこと等、堰を切ったように話され、正直その迫力に圧倒された。その後の授業はまた淡々としたものだった。

しかし、翌年のクリスマス前に、体調を崩して施設に移られ、授業は終わりとなった。東欧とは、ポーランドだと後に知った。

心の中にいつまでも

大西律子

私の中のクリスマス……といえはやはり経堂北教会の存在無くしては語れない、というより、それがすべてだと思います。

私たち家族が初めて経堂北教会を訪ねたのは、確か1994年の秋頃、娘が幼稚園の年長、息子がやっと1歳になった頃でした。長年通っていた教会を離れ、新しく私たち家族の居場所となる教会を探していたのです。経堂北教会の礼拝に何回か出席させていただし、いよいよクリスマスの時期がやってきました。祝会当日、今からCSのミュージカルが始まるという礼拝堂は、子どもたちやそのご家族、教会員の方達で溢れんばかりでした。その熱気にまずびっくり！そして一番後ろの立ち見席でミュージカルを観劇した私たちは、その素晴らしさにまたびっくり！教会からの帰り道、私たち夫婦は「ここにしよう！」と心

に決めました。

それから我が家のクリスマスは、毎年CSミュージカルが中心のクリスマスとなりました。娘が恵泉中学に入学すると友だちを教会に誘い、祝会の日はその友だちも一緒にみんなでお昼に焼きそばと焼きうどんを食べて教会に行く、というのが恒例でした。子どもたちの歌や踊りを楽しみ、帰ってきたら主人が撮ったビデオをまた何回も見て盛り上がります。毎年子どもたちの成長を見ながら、そんなクリスマスの過ごし方がとても楽しく、幸せでした。その子どもたちも30代となり、それぞれの人生を歩んでいます。先日この原稿を書くにあたり、息子に「クリスマスの思い出って何かある？」と聞くと「それってまさに経堂北教会なんじゃない？」と即答でした。子どもたちも今はほとんど教会に來れなくなってしまうましたが、経堂北教会で過ごしたクリスマスの思い出が、今でもしっかりと心の中に存在していることを嬉しく思います。この原稿を書いていたら、またあの頃のビデオを見たくなくなってきました。

平和を祈るクリスマス

加藤玲奈

クリスマスに向けて過ごすアドベントは、イエス様の御降誕という喜びが胸の中でふつつつと静かに湧く時期です。そのふつつつ感がクリスマスに向けて次第に高揚していくのですが、最近は特別な何かを求めるよりも、無事にクリスマスを迎えたいという気持ちが強くなりました。そしてクリスマスの後には、生まれ変わった気持ちで歩み始めるのが最近のクリスマスの過ごし方でしょうか。

特にこの数年は戦争が各地で勃発し収束が見えません。国や民族同士の争いが恒常化している情勢が終わり、神様が望む平和なクリスマスを迎えることが出来ますように。平和を願いつつも何もできていない私ですが、音楽に携わる身として思うことは、音楽（芸術）は国や人種、立場を超えて人と人を結び付ける力があるということです。指揮者・ピアニストでイス

ラエル国籍のバレンボイムは、「音楽は平和への架け橋」になる、と対立するイスラエルとアラブ諸国出身の若者が集うオーケストラを設立し、指揮を続けています。未来に希望をもてる素晴らしい活動だと思っています。芸術が人の心に平和という種を蒔くことが出来るならば、その種が育つための土壌である芸術活動に触れる場所、時間が世界中にもっと増えてほしいと思います。私も神様から頂いた賜物を活かし、ピアノを教えること、コンサートを行うことが平和へ繋がる一歩になれたらと思います。

先日、長年にわたり家族で交わりを持たせて頂いた杉本正和さんが逝去されました。CS時代から変わらない笑みを湛えたお顔と、温かく包み込むような話し方、ふくよかな歌声が今も耳に残っています。幼少の時、広島原爆でご家族を失うという大変なご経験を、最後にご一緒に食事した折にお聞きしました。故杉本ご夫妻が、天国から声を合わせて讃美歌を歌い、神様と共に真に平和なクリスマスを祈ってくれていると信じています。

召天者記念礼拝に出席して

祖母を想う時間

杉本桃子

祖母（杉本和子）が天に召されてから15年の月日が経ちました。料理上手で、誰に対しても沢山の愛情をくれるスーパーおばあちゃんでした。

当時、小6〜高3の7人の孫たちの成長を心から楽しみにしていたことでしょう。そして何より、残された祖父を心配していたことでしょう。

私は、今回初めて召天者記念礼拝、愛餐会に参加させていただきました。せわしない日々の中で薄れていた祖母との大切な記憶を想うことができ、幸せな時間を過ごすことができました。そして、祖母に「この15年間あなたの愛する家族がどのように過ごしたか」を伝えることができました。

祖父が祖母の分まで見守り応援し、愛情をくれたこと。孫たちは、バレエ、ラグビー、チア、好きなことを全力で謳歌し、夢を叶え、新しい家族ができたこと。祖父が、多くの方に支えていただき

ながら、家事を習得し、幸せな時間を過ごしていること。祖母の話をするときには、「和子は本当によくやってくれた」と、今も深く祖母を想っていること。そして、80歳を過ぎた頃には、平和の大切さや広島家族について、話してくれたこと。

私は、お別れ以上に悲しいのは、大切な人の声や表情、思い出の記憶が薄れることだと考えます。この世での別れは必ず訪れます。だからこそ、思い出を語り合い「今頃、天国で何をしているかな」と思いを馳せることが、今出来る最大限の愛の形だと思います。それを余すことなく出来た、この機会に感謝いたします。

つい先日、祖父・正和も天国へ旅立ちました。15年ぶりの再会、きつと話が尽きないことでしょう。二人の時間をゆつくりと過ごしてください。最後に、祖父母を支えてくださった経堂北教会の皆様、心から感謝いたします。

おじいちゃん、おばあちゃん、溢れる愛をありがとう。二人の孫で心から幸せです。これからも、私たちを見守っていてください。

追悼

母の思い出

故・大村ヨ子姉

母・大村ヨ子さんが10月21日に老衰のため104歳で亡くなりました。もう少しの間元気できてほしかったというのが今の率直な気持ちです。

母は大正10年に鹿児島県の田舎で田中家長女として誕生し、戦争、弟の戦死、父親の死等、過酷な体験を経、女学校卒業後は女手一つで母親を支えています。芯の強さは、その頃培われたものだと思います。

その後、無医村に医師として赴任中の故大村潤四郎と知り合い、25歳で結婚します。潤四郎の父で南満州鉄道総裁を務めた故大村卓一が敬虔なクリスチャンであったことが、後の母のキリスト教信仰へつながる第一歩でした。結婚後、長男の私の誕生を機に東京に居を移します。生活の激変に戸惑い、苦労しながらも気丈に乗り越

え、その後娘二人を授かり、子供三人を無事育て上げました。母は常に優しく素敵でしたが、母のことで、今まず思い出すのは、書道が得意なこと、料理が上手なこと。私は母の美しい書体に憧れ、見習っていました。料理では、小学校から大学まで、我が家で食事をした友人の大半が母の料理の虜となるほど美味しく、それが私の母自慢の一つでした。

子供たちの成人後、キリスト教に触れる機会が徐々に増え、最終的に病身の潤四郎と二人での受洗につながります。その前後の心の葛藤は母の機関誌への投稿から伺い知ることが出来ます。潤四郎の死後は、その穴を埋めるように熱心に教会に通い、地域のボランティア活動への参加、婦人大学の受講など精力的に生活していました。晩年の心の支えとなっていたのが信仰心であったと思います。母は亡くなりましたが、明るく歩んできた人生を称えたいと思います。最後に、ご指導いただきお世話になりました歴代の牧師様、教会員の皆様に深く感謝いたします。

(大村岳一郎)

幼児祝福式・収穫感謝報告

11月9日に幼児祝福式が持たれました。今年は5人の幼児(偶然全員男児)が祝福に与りました。子どもたちの成長を教員一同で見守れるのは大きな喜びです。昨年まで親に抱えられていた子が、今年は親に寄り添われながらも自分の足で祝福に与りました。来年は自分だけで壇上に上られるでしょうか。幼児祝福式は召天者記念礼拝の翌週に持たれます。神様の御許に召された兄弟姉妹がいる一方、祝福に与る幼い子どもたちがいる。そのことに、私たちが神様をかしらとする群れであり、家族であると実感しました。

礼拝後は例年、外階段で子どもたちの集合写真を撮りますが、今年は珍しく雨でしたので礼拝堂で撮りました。

11月23日は収穫感謝日として、炭火で調理した焼き芋と焼き林檎を美味しくいただきました。昨年は牧師館工事で庭が使えず、市販

のスイートポテトで代替しましたが、やはり熱々出来立ての芋や林檎が良いに決まっています。みんなホクホク顔で笑顔が綻びます。松谷先生の教会学校の礼拝説教も収穫感謝についてでした。みんな神様が与えてくださる恵みに心から感謝することができました。

幼児祝福にしても、収穫感謝にしても、共通するのは神様からの祝福と恵みです。「私が植え、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神なのです。」(コリント3:6-7)(原良介)

上：幼児祝福式 下：収穫感謝

長老のファイル

秋は行事が多い時期です。11月は毎週行事が続きました。

11月2日には召天者記念礼拝が持たれました。この一年で召天されたのは9名で、当日の礼拝出席は155名、愛餐会出席は65名でした。主日礼拝が、地上だけではなく天上でも時を同じくして持たれているもの、と頭で理解していても、召天者写真に囲まれて礼拝を守ることでの解像度が高まります。

昨年まで岸・前牧師が愛餐会を含む全てを仕切っておられました。しかし、一年で最も礼拝出席者が多い日だけに、松谷牧師が初年度から全てを担われるのは困難と、昨年度のうちに澤田長老と私が岸・前牧師から引継ぎを受けておりました。今回、引継ぎ資料を基に、松谷牧師と連携して準備にあたりましたが、正直申して細部は手探りでした。ご不便をおかけした点があったかもしれませんが、大きな混乱もなく記念礼拝と愛餐会を持てたことは、皆様のご協力と神様の御業に、ほかなりません。

せん。感謝申し上げます。

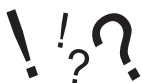
次年度に向けて改善すべき点は早々に手を打てばと思います。また、召天者写真の掲額スペースも限られてきており、窓面が埋まった場合の対応を検討しなければなりません。妙案があれば、是非ともご教示ください。

翌週の11月9日には教会学校との合同礼拝と幼児祝福式が持たれました。こちらは、11月23日の教会学校による収穫感謝日の報告とともに別述のとおりです。そして11月16日は創立88周年記念礼拝でした。礼拝が途切れることなく、信仰の火が点され続けるよう、伝道に励みましょう。

待降節に入りました。今年のクリスマスも昨年同様、クリスマス礼拝後に愛餐会・祝会が行わず、教会学校のパフォーマンスのみ行われます。子どもたちは練習を頑張っていますので、是非ご予約ください。クリスマス・イブ礼拝は19時からで、今年は礼拝後、数年ぶりに茶話会を持ち、その後に有志のキャロリングを予定しています。良き準備のときが与えられますように。

(原良介)

個人消息



掲示板



- 教会学校クリスマス
12月21日(日) 午前9:00
- クリスマス礼拝
12月21日(日) 午前10:15
- クリスマスイブ礼拝
12月24日(水) 午後7:00
- 歳晚礼拝 12月28日(日) 午前10:15

編集後記



▽今年はお世話になった多くの信仰の先達が天に召されました。親友が病を思い、自分も生命について考えることが増えました。そんななかで迎えるクリスマス。出来ることを精一杯やろうと思います(酒井)

「栄 光」2025 年 12 月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧 師：松谷祐二
編 集：栄光編集委員会
Email：church@kyodokita.com
HP：http://www.kyodokita.com

牧師の寄り道



経堂北教会に来て、三度目の葬

儀を経験した。葬儀は、遺族にとっても、参列者にとっても、その人の死を通して、その人の生を振り返る機会、また、神がその人をどのように支え導き、用いてくださったかを思いめぐらす機会となる。牧師になったがために、他の職業よりもその機会を頻繁にいただくようになった。いや牧師でなくとも、主にある兄弟姉妹を愛す

ることを心掛けている人は、教会で仲間の葬儀に立ち会う機会も、おのずと多くなることがだろう。

それは私たちの心に重く、つらいことに感じられもするが、大切な機会であるにちがいない。私が葬儀によく用いる式文には、「私たちにも、自らの終わりを深く思わせてください」という趣旨の祈祷文がある。死を直視する人は、どう生きるべきかを考えるようになる。神の御前に、どう生きるべきかを。「残りの日々を数えるすべを教え 知恵ある心を私たちに

与えてください」(詩編90・12)。「弔いの家に行くのは酒宴の家に往くにまざる。そこには、すべての人間の終わりがある。生きる者はそれを心に留めよ」(コヘレト7・2)。「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを思い出しなさい。彼らの生き様の結末をよく見て、その信仰に倣いなさい」(ヘブライ13・7)。

良い信仰の先達は、その死を通して、私たち残された者に、大きな益を与えてくれる。しかし、そのどれよりも刮目すべき死、すべ

での信仰者を生かし、限らない益を与える、ただ一つの死がある。

既にアドベントに入った。クリスマス、私たちは神の御子イエス・キリストの降誕を祝う。本来は、その降誕のゆえに万人が祝い、神をほめたたえるのがふさわしい方だ。しかし多くの人は、この出来事にそこまでの意味があるとは思えない。御子イエス・キリストの生の意味は、その死を見つめるときに初めて、明らかにするものだからだ。そのことを、私たちは忘れないようにしたい。(松谷)